

# 国民映画《John Rabe (ジョン・ラーベ)》の越境的・多国間的な物語構造の分析：

ポスト・ナショナルな時代のドイツ・ナショナル・アイデンティティ

古川裕朗

(受付 2013年5月31日)

## 基本情報

タイトル：John Rabe

脚本・監督：Florian Gallenberger

制作国：ドイツ，フランス，中国

受賞：2009年ドイツ映画賞最優秀劇映画賞（金賞）

DVD Video: "John Rabe", 2010 Majestic Home Entertainment GmbH, Vertrieb durch 20th Century Fox Home Entertainment Deutschland GmbH, Frankfurt am Main.

主要登場人物：役者（備考）

John Rabe: Ulrich Tukur（主人公，ジーマンス南京の支配人，南京安全区国際委員会の委員長）

Dr. Georg Rosen: Daniel Brühl（ユダヤ系ドイツ人外交官，安全区国際委員会のメンバー）

Dr. Robert Wilson: Steve Buscemi（アメリカ人医師，安全区国際委員会の副委員長）

Valérie Dupres: Anne Consigny（女学校のフランス人校長，安全区国際委員会のメンバー）

Dora Rabe: Dagmar Manzel（ラーベの妻）

Langshu: Zhang Jingchu（女学校の生徒）

Prince Asaka Yasuhiko: Teruyuki Kagawa（朝香宮鳩彦王中将：香川照之）

Werner Fliess: Mathias Herrmann（ジーマンス南京の後任の支配人，ナチズムの信奉者）

Nakajima Kesago: Tetta Sugimoto（中島今朝吾中将：杉本哲太）

Matsui Iwane: Akira Emoto（松井石根陸軍大将：柄本明）

Major Ose: Arata（小瀬少佐）

John Magee: Shaun Lawton（英国国教会〔米国聖公会〕系の牧師，安全区国際委員会のメンバー）

Lewis Smythe: Christian Rodska（安全区国際委員会のメンバー）

Dr. Oskar Trautmann: Gottfried John（駐華ドイツ大使）

Han: Fang Yu（ジーマンス南京におけるラーベの代理人，中国人）

Chang: Li Ming (ラーベの中国人運転手)

Chiang Kai-shek: Dong Fu Lin (蒋介石)

Fukuda Tokuyasu: Togo Igawa (福田篤泰, 日本人外交官)

## 目 的

国民国家という枠組みがゆるみ、越境的 (transnational)・多国間的 (international) なものを良とするポストナショナルな時代の価値観を前にしては、ナショナルなものを表立って主張することは一般的に憚られるであろう。またこのような時代にあつて、とりわけナチスの傷痕が残るドイツ社会においては、ナショナル・アイデンティティの形成に寄与するようないわゆる「国民映画 (national cinema)」を制作する際は、十分な慎重さが要求されるに違いない。『ドイツ国民映画』の著者ザビーネ・ハーケは、ベルリンの壁崩壊 (1989) および東西ドイツの統一 (1990) 以降における国民映画の可能性を、越境的なものや多国間的なものとの「妥協」のうちに見出している<sup>(1)</sup>。例えば、ナチス時代のドイツを題材とした、いわゆる“第三帝国映画 (films about the Third Reich)”のうち、ドイツ＝ユダヤのアイデンティティを巡る物語であれば、それを現代ドイツの他民族的・多文化的な社会という現状に引きつけた「越境的な美学」の文脈において捉えることが可能であるという<sup>(2)</sup>。またこのことと符合する形で、ハーケはナチの時代が歴史主義的な回想の対象あるいはノスタルジックな憧憬の対象へと、またメロドラマ的・感傷的な物語設定の中で商業的に消費される対象へと「脱政治化」されたと主張する<sup>(3)</sup>。言わばナショナルなものが何らかの妥協の結果として希薄化されてしまったことを示唆するのである。

しかしながら、2000年代の第三帝国映画に関してドイツ映画賞などの高い評価を獲得した作品を観察すると、越境的・多国間的な物語設定のうちに“良きドイツ国民”の姿を積極的に描こうとする明らかにナショナルな傾向が存在したことを無視することはできない<sup>(4)</sup>。例えば、《Nirgendwo in Afrika》(2002年ドイツ映画賞金賞)では、主人公のユダヤ人一家がドイツでの迫害を逃れてアフリカに渡るという越境的設定から始まり、アフリカでの多国間の交流を通じてドイツ国民としてのナショナル・アイデンティティに目覚め、そして新しいド

---

(1) Sabine Hake, *German National Cinema*, London 2008, p. 221. (ザビーネ・ハーケ『ドイツ映画』山本佳樹訳, 鳥影社, 2010年, 329頁)

(2) *Ibid.*, p. 216 (同書, 320頁)

(3) *Ibid.*, p. 213 (同書, 316頁)

(4) 拙論「ドイツ映画《John Rabe》におけるラーベ像の国家社会主義に対する位置づけ——「単なる党の一員」と“良きドイツ国民”の系譜——」(『広島修大論集』, 第53巻第2号, 143-157頁, 2013)を参照せよ。

イッの建設に参加するべく再びドイツへ帰るという越境的設定で終わる。タイトルにも含意されているように、ドイツ語を話し、ドイツ文化の中で生きてきた主人公のユダヤ人一家は、自分たちの本来の国 (Land) を結局ドイツ以外には「アフリカのどこにも」見つけることができ「ない」のである。

越境的・多国間的な物語設定のうちに“良きドイツ国民”の姿を描くこうした傾向は、2000年代の終わりの《John Rabe》(2009年ドイツ映画賞金賞、日本未公開)において最高潮の高まりを迎えたと言える<sup>(5)</sup>。この映画は、30年近くを中国で暮らしたナチ党員のビジネスマン、ジョン・ラーベがドイツ本国への帰国準備を進めていたものの、日本軍による南京攻略のために中国に残ることとなり、様々な困難を経てついに帰国の途につくという越境的な物語設定を基本構造とする。重要なのは、クライマックスにおいて、ラーベが委員長を務める国際委員会が設置した安全区を、日本軍が無理矢理、取り去ろうとしたとき、安全区を守るべく日本軍の前に中国の民衆が立ちふさがる場面である。その際、中国の民衆にドイツ人のラーベを初めとしたアメリカ人、フランス人、英国国教会の牧師、ユダヤ系ドイツ人からなる国際委員会のメンバー、さらにラーベの中国人秘書が加わり、そうした著しい多国間関係の中、機転の利いた駆け引きによって日本軍から人々の命を救ったラーベが、英雄的な“良きドイツ国民”として位置づけられることとなる。

こうした越境的・多国間的なものとナショナルなものとの交差は、確かに一面において、ナショナルなものを提示し得る可能性を回避的に模索しようとしたことの結果であったとは言えるだろう。しかし、そこでは両者がお互いの特性を薄め合うような関係にあるのではなく、むしろナショナルなものが、まさに越境的・多国間的な物語の中にこそ積極的かつ肯定的な価値を持って発露してきているのを認めるのである。

冷戦終結以降のドイツ映画における集団記憶とナショナル・アイデンティティの問題を論究するゲルハルト・リュエデカーもやはり、近年のドイツ映画における「良きドイツ人 (gute Deutsche)」の存在を指摘しており、そうした映画は「暗い過去を克服し、新しいものを建設し、つまりは現在の基礎を築く」ものであると主張する<sup>(6)</sup>。すなわち、映画においてナショナルなものが肯定的・積極的な役割を果たしているのを認めるのである。またリュエデカーは《John Rabe》に関しても、ラーベは人間の命を救っただけでなく、記憶における「国民の良心」も救済したのだと指摘する<sup>(7)</sup>。このことは、映画《John Rabe》がナショナル・アイデンティティの形成に積極的に寄与する「国民映画」であることを示唆した

(5) 同拙論を参照せよ。

(6) Gerhard Lüdeker, *Kollektive Erinnerung und nationale Identität, Nationalsozialismus, DDR und Wiedervereinigung im deutschen Spielfilm nach 1989*, München 2012, S. 202–203.

(7) *Ibid.*, S. 174.

ことになるを理解してよい。

さて本稿の目的は、このような国民映画《John Rabe》の越境的・多国間的な物語構造を分析し、これによって《John Rabe》がポスト・ナショナルな時代においてナショナル・アイデンティティを提示する可能性をどのように模索しているかを明らかにすることである。

## 物語構造の分析

### 1. ラーベと日本人

#### a) 信頼される日本人

映画の中では、防共協定を結ぶ日本に対してラーベが相当程度の信頼を寄せていることが分かる場面がたびたび挿入される。とりわけ物語の前半では、日本人に対するラーベの評価・印象は肯定的である。そのような場面として次の5つを例示することができる。

- ①映画冒頭の場面では11月27日のラーベ日記が読み上げられる。それはラーベの日本人に対する信頼感を示す次のような言葉で始まる。「日本人が上海の街を焦土に変えたそうさ。私は信じることができないし、信じたくもない。」この言葉は、次に続く「いつもの中国のプロパガンダだと思う」という言葉と対照をなしており、日本人と中国人に対するラーベの信頼度がやがて逆転していく上での前提をなしている。
- ②ラーベが自身の歓送パーティーに出席した際、そこには日本人外交官の福田も同席していた。駐華ドイツ大使のトラウトマンは福田のことを「とんでもないおべっか使い」と悪く言うが、一方、ラーベとしては福田のことを好ましく思っていたことが示される。
- ③日本軍の爆撃が始まったとき、ラーベはジーマンスの中国人従業員を守るために、ナチスの党旗であるハーケン・クロイツの旗を広げ、その下に中国人を避難させた。日本軍はこの旗を見ると爆撃をやめて引き返した。このシーンは映画の予告編にも使われており、映画全編を通して最も印象的でセンセーショナルな場面の一つである。日本軍が引き返したのは、日本がドイツの協定国であったからだが、ここではドイツの協定国である日本に対してラーベが一定の信頼感を抱いていたことが示されている。
- ④日本軍による南京攻略戦が本格化した際、今後の対応に関し、南京在住の欧米系外国人の間で話し合いの場がもたれた。その際、ユダヤ系ドイツ人外交官のローゼンは、上海における日本軍の蛮行を伝え、南京に安全区を設置することを提案する。しかし、ラーベは日

本軍が撒いたビラを信頼し、日本は大惨事を避けようとしているはずだと訴え、安全区の必要はないと主張した。

- ⑤ラーベは朝香宮中将与との対面において、握手を求められるまでは手を差し出してはならないとローゼンから忠告されていたにもかかわらず、自分から握手を求めた。またラーベは、朝香宮中将与との会談において、日本軍の蛮行を止めさせてもらうよう率直に要請し、改善を期待する。いずれの場合も、ラーベ自身の率直で公正な性格が表れているが、同時に朝香宮中将对しても率直さと公正さを期待できるとラーベが考えていることが示されている。

#### b) 欺瞞に満ちた日本人

日本人に対して信頼を寄せるラーベの姿と対照的に、ラーベの知らないところで狡猾に事を進める欺瞞に満ちた日本人の姿が挿入される。以下にその場面を例示する。

- ①ラーベが外交官の福田を好ましく思っていることがラーベの歓送会の中で示されるが、それと対照される形で、日本軍の爆撃が始まる直前に福田夫妻が意味ありげに顔を見合わせ、パーティー会場を立ち去る場面が挿入される。ここから日本軍による攻撃が行われることを福田夫妻が知っていたことが暗示される。
- ②小瀬少佐は南京攻略戦の際、包囲作戦によって犠牲者を出さず都市を降伏させることを提案した。しかし、上司の朝香宮中将是次のように発言する。「ゾウというものは包囲してはいけない。降伏するまで弱らせてもいけない。捕獲してもいけない。殺すか、殺されるか、それのみだ。」つまり、南京の都市・住民の殲滅、捕虜の虐殺を命じている。このとき朝香宮中将是比喩を使って遠回しに述べることにより、作戦の実行の主体を中將の言葉を解釈する部下に委ね、自身の責任を狡猾に回避しようとする。
- ③朝香宮中將の思惑とは違って、部下の小瀬少佐は大量の捕虜を抱える結果となった。朝香宮中將は、捕虜の処遇を巡って、違法であることを知りながら、部下の小瀬少佐に捕虜の処刑を暗に促す。その際、中將は捕虜の処刑を明言せず、捕虜の処遇の方法と責任をすべて少佐に委ねるといふ卑劣なやり方をとる。小瀬少佐はこれを受けて捕虜の虐殺を実行する。この朝香宮中將が処刑の命令を間接的に行う場面とそれを受けて小瀬少佐が虐殺を実行する場面との間に、会議の中でラーベが日本軍への信頼を主張する場面が挟まれる。

- ④松井大将から、なぜ南京の包囲を解いて攻撃をしたかを問いつめられた際、朝香宮中将は、「私の甥である天皇陛下は、迅速な勝利を望んでおられます」と述べた。中將は、天皇と親類関係にあることを利用し、天皇陛下の意志を恣意的に忖度するという形によって南京攻撃の正当性の権威付けを行う。
- ⑤朝香宮中将とラーベとの会談において、朝香宮中将は、ラーベの妻ドラの乗った客船が日本軍によって撃沈されたことに触れ、この爆撃は何らかの手違いによって引き起こされたものであったと詫げる。その際、外交官の福田氏が朝香宮中将に日本語で耳打ちをし、妻ドラが助かって上海に連れて行かれたことを朝香宮中将は知る。しかし、朝香宮中将は、その情報をラーベに知らせることはなく、ラーベに対しては妻ドラの消息について何か情報が入ったらすぐに報告すると偽って述べる。
- ⑥物語の終わりでは、各国の外交官とプレスが南京に戻り、日本軍は方針を変える。ラーベたちが作った安全区を朝香宮中将は日本軍が設置したものとして発表し、筋金入りのナチ信奉者でジューメンス南京支社の後任の支配人であるフリースを安全区の管理者として紹介する。ラーベはこの様子を見ながら帰国の途につく。

c) 強欲で残酷な日本人

最初、日本人に対して信頼を寄せていたラーベであるが、日本兵の強欲で残酷な行為に直面し、その理不尽さの中で次第に疲労感や焦燥感を募らせてゆく。ただしドイツの協定国として抱いていた日本への信頼感をラーベが一切無くし、日本人に対して決定的な敵対感情を抱くことは無い。そうした場面を以下に例示する。

- ①ラーベは妻ドラと共にドイツへ帰国するはずであった。しかし、安全区国際委員会の委員長に選ばれ悩んだ結果、出航の直前で中国に残ることを決意し、予定の船には妻ドラだけが乗り込む。ところが、ドラの乗った客船は出航の直後、日本軍によって爆撃され、沈没する。ラーベは妻を失い、深い悲しみと激しい無力感に襲われる。ただし、ラーベが日本人に対して激しい怒りを示すことはない。
- ②ローゼンが安全区へ米を運び入れようとする、日本軍はそれに通行税をかけようとする。ラーベはこれに憤り、激しく抗議する。また安全区の中で中国人女性に対して発砲する日本兵をラーベは目撃し、激しく抗議する。ただし、いずれの場合もナチ式敬礼によってドイツ人であることをアピールしており、ラーベの抗議は日独の信義的關係への期待が

あることを前提としている。

③映像や写真を通じてラーベは日本軍のすさまじい蛮行の様子を知り、愕然とする。また安全区国際委員会の中でいわゆる“百人切り競争”が問題となり、ラーベ自身もこれによって運転手のチャンを失い、著しく落ち込んでいた。ただし、いずれの場合においても、ラーベが日本人に対して激しい敵意や憎悪を見せることはない。ラーベはヒトラーへ手紙を書き、日本軍の蛮行を止めさせるよう要請するが、ここには依然として日独両国の信義的な関係に期待するラーベの態度が表れていると言ってよい。

④道路にできた穴を、日本軍が死体を埋めて塞ごうとしている場面にラーベは遭遇する。いっしょにいたローゼンはこのことに抗議するが、ラーベは事態の野蛮さに啞然としてもはや抗議する気力すら失う。この場面は、本稿において後に再度取り上げるが、中国人女性のランシュエが自身の父親を丁重に埋葬する場面と対照をなしており、遺体を粗末に扱う日本人と大切に扱う中国人とが対比的に描かれている。

#### d) 良心的な日本人

強欲で残酷な日本人を数多く描きながらも、わずかながら良心的な日本人という役割を担った人物も登場する。そうした場面を次の通り例示する。

①南京の包囲作戦を解除して都市攻撃を行ったのは小瀬少佐であるが、彼はもともと犠牲者を極力少なくするために南京を包囲して相手の降伏を待つという方針であった。また多数の捕虜の虐殺を実行したのも小瀬少佐であるが、もともとは違法性を認識していたために捕虜の処刑を避けていた。いずれの場合も、小瀬少佐に指示を出したのは朝香宮中将である。また小瀬少佐は、朝香宮中将が捕虜の秘匿を理由に安全区の撤廃を目論んでいることをローゼンに知らせる。この密告が結果として安全区の住民を救うことにつながる。小瀬少佐と朝香宮中将は「良き日本人」と「悪しき日本人」として対比的に描かれている。

②中島将校は、朝香宮中将の腹心の部下であり、映画の中でいわゆる“百人切り競争”にもかかわっている。しかし、病気で倒れたラーベのためにインシュリンを渡すことを許可してもいて、完全な悪役として描かれている朝香中将の役回りとは一線を画す。

#### 【小考察1】

物語の前半では、日本人に対するラーベの印象や評価は肯定的である。ところが、ラーベ

が日本軍の強欲で残虐な行為をたびたび目の当たりにするうちに、日本人に対して抱いていた肯定的なイメージがラーベの中で崩れていく。その様子は、ラーベが深い悲しみや無力感に襲われ、徐々に疲労感や焦燥感を募らせていく姿を通じて表現される。とはいえ、ラーベ自身も日本軍によって妻ドラの乗った船を爆破されていたにもかかわらず、最後までラーベが日本人に対して決定的に憎悪や敵対感情を向けることはない。激しい負の情念がラーベに欠けていることは、ラーベの寛容さ・鷹揚さを示しているとも言えるが、このことの原因は、どちらかと言えば別の点にある。ラーベは日独の信義的な関係に積極的に期待し続けるのだが、日本人に対するこうした信頼は、むしろラーベ自身の率直さや誠実さを表現することに寄与している。ゆえに日本人に対するラーベの負の感情は、極力抑えられなければならないのである。

また他方において、ラーベの知らないところで狡猾に事を進める欺瞞に満ちた日本人の姿も並行して挿入される。観者は、日独の信義的な関係に期待をし続けるラーベの姿との著しい対比の中で日本人の狡猾な姿を目にする。このことはラーベをまた別の形で特徴づける。すなわち、率直で誠実ではあるが、世間の狡知に疎いナイーブな人物として観者の目には映ることとなる。最終的に朝香宮中将与ナチズムの信奉者フリースが握手をすることによって、日本とナチス・ドイツとはその狡猾さによって親近性を示し、結果としてナイーブなラーベをナチズムから引き離すことに寄与するところとなる。

## 2. ラーベと中国人

### a) 信用されない中国人

ドイツ人であるラーベは、当初、中国人をあまり信用していなかった。そうしたことが分かる場面を以下のように例示する。

- ①映画冒頭の11月27日のラーベ日記では、日本人による上海戦の惨状が語られる。これをラーベは「いつもの中国のプロパガンダであろう」と述べ、信頼を寄せない。これは日本人に寄せるラーベの信頼感と対比的に描かれる。
- ②12月1日のラーベ日記では、日本軍が巨大な戦力を持って近づいてきていることが書かれている。ただし、その情報源が中国人運転手のチャンであることから、情報の信憑性にラーベは疑いを持っている。
- ③ラーベは朝香宮中将对して日本軍の蛮行を止めてもらうよう要請する。それに対して中將は、中国のプロパガンダに過ぎないと主張する。ラーベはこれを受け入れるわけではな



いが、ここではプロパガンダを行うことが中国の一般的イメージとして前提されている。

#### b) 指導される中国人

ドイツ人のラーベから見て中国人は物覚えが悪いが、力には従順な存在として映る。ラーベが中国人を軽んじつつも、ドイツ的教養を中国人に身につけさせることに少なからず熱意を持って取り組んでいたことを示す場面を以下に例示する。

- ①ラーベは帰国準備にあたって、自身のピアノを部屋から運び出さなくてはならない。ラーベはピアノを部屋から運び出すため、中国人従業員たちに一生懸命指示を出す、それがなかなかうまく伝わらない。ラーベは、どんなに指示を出してもピアノを運び出すという単純な作業すらできない中国人従業員たちに苛立ち、あきれかえる。
- ②ラーベと妻ドラがいる部屋に運転手のチャンがノックをせずにドアを開けて入ってくる。日頃から部屋に入る際はノックをするよう指導していたはずであるが、いまだにそれが徹底されて身につけていない。さらにチャンが重要な用件をラーベに取り次いでいなかったことも判明する。何のために頭がついているのだとラーベが尋ねると、「肩が雨で濡れないように」とチャンは見当はずれな解答をし、この解答にラーベが笑う。このように中国人の物覚えの悪さをラーベは嘆き、そして軽んずる場面が描かれる。また一方において、ラーベは、帰国間近であるにもかかわらず、「原則の問題だ」と主張して、もう一度ノックをして部屋に入るようやり直しをさせる。「原則」を振りかざすこの行為は、教条主義的ではあるが、中国人をドイツ式に指導することへの情熱を見せる場面でもある。
- ③ラーベはナチ式敬礼をずっと中国人に教え込んできた。ラーベが後任のフリースの前でナチ式敬礼を中国人にやらせてみせ、この程度のことを身につけさせるのにどれだけの時間を費やしたかを、いわば成果に伴う苦労話の一つとして語る場面があるが、まだ右と左を間違える中国人がいた。その際、ラーベは中国人を、厳しい指導者には従順であり、しつけを必要とする子どものようなものだと述べる。また優秀な中国人とそうでない中国人とを見分けることが重要であるとも主張した。ここにはラーベが中国人を単なる労働力とみなしている姿が描かれているが、一方において、父権主義的ではあるが、中国人の可能性にラーベが期待を寄せていることも示されている。
- ④ラーベの歓送会でご婦人たちは、中国では「赤ワインは冷たく、ビールは生ぬるく、シャンパンには氷が入っている」と述べ、中国人の物覚えの悪さを嘆く。一方、その歓送会に

においてラーベは中国人の英雄として蒋介石から勲章を授与され、長年に渡り中国人を指導してきたことを顕彰される。

- ⑤日本軍の攻撃によって南京の電話機能が麻痺したとき、迅速に対応しない中国人従業員をラーベは叱責し、すぐに復旧させるよう指示を出す。

#### c) 慈しまれる中国人

映画の前半では、ラーベが中国人を厳しく指導しまた軽んずる場面がたびたび挿入されるが、やがて中国人はラーベにとって自分が守ってやるべき慈しみの対象として描かれるようになる。そうした場面を以下のように例示する。

- ①日本軍による爆撃の際、フリースがジューメンスの会社施設を守るために中国人従業員を会社の敷地から締め出そうとしたのに対して、ラーベは中国人従業員を敷地内にいれて保護する。そして、フリースが敬意を示していたナチ党の党旗を使い、中国人を日本軍の爆撃から守った。
- ②ラーベは日本軍の攻撃を避けるため、中国人従業員を自身の住居の中庭に住ませる。その後、ラーベは安全区国際委員会の委員長を任されることになる。しかし、一方でラーベは当初ドイツへ帰国する予定でもあった。ラーベが中国人たちのことを思い、ピアノを弾きながら南京に残るかどうかが考えあぐねる場面が描かれるが、そうしたラーベのピアノの音色に中庭の中国人たちは耳を傾け、ラーベと中国人の心が通い合う様子が演出される。
- ③いわゆる“百人切り競争”で、ラーベは運転手のチャンを失う。その代用という名目で20人の捕虜を救い出す。その晩ラーベは、可愛がっていたチャンをはじめ、多くの中国人たちが理不尽な形で命を奪われたことで深い悲しみと無力感に襲われる。
- ④自分のお金を安全区内の中国人に配る。

#### d) 良き中国人

映画全編を通じ、中国人に関しては否定的な描写が数多く見られる一方で、時おり優秀で、良識と勇気を持った中国人の姿が描かれる。以下にそうした場面を例示する。

- ①女学校の生徒であるランシューは才能があり聡明な中国人女性であるが、家庭環境に恵ま

れなかった。やがてランシューは父親を日本兵に殺されることとなる。この父親は決していい父親ではなかったが、ランシューは危険がある中、父親を丁重に埋葬する。このシーンは死体を粗末に扱う日本人との対比において描かれる。

- ②ラーベの代理人を務めていたハーンは、ラーベも認めるように優秀な中国人である。当初ハーンはあくまでラーベの部下に過ぎなかったが、やがて物語が進展するうちに、安全区を守る同志の一人として扱われるようになる。
- ③物語の終盤において、中国の民衆は安全区の門の前に集まり、安全区を撤廃しようとする日本軍の前に立ちふさがる。この場面は、当初、否定的な描かれ方をしていた中国民衆がラーベたち欧米人によって啓蒙された結果、市民的勇気を持ち、自律した存在へと成長したことを示している。そしてまた共に悪しき日本人へと立ち向かう欧米人の仲間に加えられたことをも意味する。

## 【小考察2】

物語の序盤において、中国人の描かれ方は概ね否定的である。中国人は物覚えが悪く、信頼できない人々として極めて軽んじられた描かれ方をされていた。ただ、その中で時おり、優秀で、良識があり、聡明な中国人の姿も描かれる。特にラーベに関しては、そうした中国人の可能性に期待しており、ドイツ的な教養を身につけさせようと中国人を指導し、そのことに少なからぬ熱意を持って取り組んでいたことが強調される。とはいえ、その際も中国人に対して「原則」を振りかざすラーベの接し方は教条主義的で父権主義的な厳しいものがあった。

ところが、日本軍の強欲で残酷な言動を目にする中で、ラーベの中国人に対する接し方は物語の中盤から別のトーンを持って描かれるようになる。ラーベにとって中国人は厳しく指導すべき対象というよりも、保護して慈しみや愛情を注ぐべき対象へと変化してゆく。

やがて中国人はそうしたラーベの保護からも抜け出すようになる。物語の終盤において、中国人たちは自ら立ち上がり、勇気を持って日本軍に立ち向かうようになる。これはラーベたち欧米人による啓蒙の成果であって、この場面は中国民衆がラーベたち欧米人の同志として、仲間に加えられたことを意味する。

## 3. ラーベと他の欧米人

ドイツ人のラーベは、他の国際委員会のメンバーとの強い信頼関係を最初から築いていたわけではなく、物語が展開する中で徐々にお互いの絆を深めていく。以下、ラーベが他の欧

米人からの信頼を勝ち取っていく様を例示する。

- ①アメリカ人医師のウィルソンは、大変な皮肉屋であり、あらゆるものに不満を発する人物として描かれる。ウィルソンは初めナチ党员であるということを理由にラーベを毛嫌いしていた。また中国の高官たちに対しても批判的であり、蒋介石がラーベに勲章を授与する際も、極めて否定的な意見を発する。さらにナチス・ドイツと防共協定を結んでいる日本のことも良く思っておらず、ラーベが日本人を弁護するような発言をする際は、辛辣な皮肉によってラーベを批判する。

あるとき安全区設置の取り決めに反して中国兵をかくまったためにウィルソンの病院のスタッフや患者が、日本兵に殺されるという事件が起きる。そのことで、ウィルソンは激しく落ち込む。その際、ラーベとウィルソンは一緒に酒を飲み、そしてヒトラーをはじめとしたナチス幹部をからかう替え唄を歌い、意気投合する。このときラーベとウィルソンは初めて接近するが、そのときはまだラーベが求めた握手をウィルソンは拒絶している。

物語の中盤から終盤にかけて、両者は安全区の運営に取り組む中で自然に関係を深めていく。そうした信頼関係が確認され、さらに深まりを見せるのは、ささやかなクリスマス・パーティーが催された晩である。日本軍が予定していた会談を突然、断ってきたという悪い知らせと教会の祭壇に誰かが多額の現金を残していったという良い知らせとが飛び込む。ウィルソンはその現金を包んだ布を見てラーベが寄付したものと察し、ラーベに対して「メリー・クリスマス」と言いながら、乾杯のグラスを差し向ける。このことは、ナチ党员ラーベに対して抱いていたウィルソンのわだかまりが完全に消滅したことを告げており、そのことは次に続く国際委員同士の親密な関係においても示される。例えば、ウィルソンは会談を断ってきた日本に対して「ひどい室内音楽、生の冷たい魚、たくさんの嘘」と悪態をつくが、この発言は物語前半のようにもはやトゲトゲとしたものではなく、国際委員会のメンバーの親密さを確認する言葉となる。そうした中で、ラーベは、クグロフが郵送されてきたことによって妻ドラが生きていることを知るが、同時にインシュリンが切れたために倒れてしまう。そのとき、ウィルソンは初めてラーベの病気を知り、医師としてインシュリンの調達に奔走し、ラーベの命を救うことになる。こうした一連の出来事によって両者の信頼関係は確実なものとなっていく。

物語の終局では、朝香宮中将とのかけひきにおいてラーベが安全区を日本軍から守り、最終的にラーベはドイツへと旅立つ。その際、安全区を設置したのは日本軍であると朝香宮中将が偽りの発表をし、ナチ党员のフリースと握手する場面がある。ウィルソンは日本人であればそうした嘘を言い兼ねず、驚くにあたらないと考えており、ウィルソンの批判の対象は最終的にラーベとは無関係な真のナチスおよび日本へと収斂してく。

- ②女学校の校長を務めるフランス人女性教師のデュプレは、物語の最初からラーベに対して積極的に好意的な態度をとっている。まずデュプレは、帰国することになっていたラーベに対して中国人の女学生たちといっしょに「For He's a Jolly Good Fellow」をお別れの歌としてプレゼントした。そして、ウィルソンがラーベのことを「ナチ（Nazi）」であるとして毛嫌いするのに対し、ラーベは単に党員に過ぎず、国家社会主義の信奉者としての「ナチ」ではないとデュプレは主張する。またラーベを国際委員会の委員長に推薦したのもデュプレである。

一方、日本軍に対するデュプレの不信や嫌悪は甚だしい。デュプレの運営する女学校に一時的に滞在させていた中国人捕虜を日本兵が引き取りに来た際、デュプレは日本兵から女学校の生徒たちを差し出すよう要求される。これに対してデュプレは激怒し、女生徒の差し出しを拒否する。その結果、引き渡した中国人捕虜をその場で日本兵によって殺されてしまう。この事件以来、デュプレは日本人への不信感から、安全区設置の取り決めに反するにもかかわらず、中国人捕虜をかくまうことになる。デュプレはこのことをラーベにだけは打ち明け、これによってラーベとデュプレの間には秘密を共有する共犯的關係が成立する。中国人捕虜のための食料を余分に確保していたデュプレは、他の国際委員会のメンバーから米の横流しを疑われる。そのときもラーベは人道主義的な観点からデュプレとの秘密を共有し続けるという度量の大きさを見せる。この秘密は最終的に、朝香宮中將に安全区を取り払う口実を与えるが、結果として、中国民衆が自ら立ち上がり、そして国際委員会のメンバーが団結する機会を提供するところとなる。物語の最後では、ラーベが再び「For He's a Jolly Good Fellow」によって、今度はデュプレ、ウィルソン、マギーの3人からドイツへの帰国を見送られることになる。

- ③ユダヤ系ドイツ人外交官のローゼンは、基本的にラーベに信頼を寄せており、両者の人間関係も良好なものであるが、それにもかかわらず両者はたびたび意見の食い違いを見せることがある。例えば、ローゼンが上海における日本軍の素行から南京における安全区の設置を提案したのに対して、ラーベは当初、日本軍を信頼して安全区の設置には賛同していなかった。また朝香宮中將との外交交渉においても、素朴に正論だけを吐くラーベに対してローゼンは外交の専門家として強い批判を浴びせた。

ラーベに対するローゼンのいらだちは、ラーベが躊躇無くナチ式敬礼をしたり、ヒトラーに信頼を寄せるような発言をたびたび繰り返したりすることにも起因する。日本兵から銃を突きつけられたとき、ラーベはナチ式敬礼によって協定国のドイツ人であることをアピールし、またローゼンにも同じようにナチ式敬礼をすることを促した。しかし、ユダヤ系ドイツ人のローゼンはそれを拒否し、後にローゼンとラーベは口論となる。結果とし

て、ラーベがドイツ本国でのユダヤ人の事情を理解していなかったことが判明し、逆説的にラーベをナチズムの信奉者から切り離すものとして機能することとなった。

ローゼンとラーベの意見の衝突は、物語の最終局面においても生じている。取り決めに反して中国人捕虜をかくまっていたことを口実に朝香宮中将が安全区を取り除こうとした際、ローゼンは中国人捕虜を引き渡すことを提案した。一方、デュブレはあくまで捕虜の引き渡しを拒否するべきだと主張する。そうこうするうちに日本軍は中国民衆に銃を向け、安全区内に押し入ろうとした。ラーベは命の危険を顧みず日本軍の前に立ちはだかる。朝香宮中将が中国人捕虜の引き渡しを要求すると、「存在しない兵士を引き渡すことはできない」とラーベはその要求をはねつけた。そして、機知に富んだ作戦によってラーベは朝香宮中将との駆け引きに勝利し、安全区、中国人捕虜の命、安全区を守ろうと立ち上がった中国民衆の命、そして国際委員会のメンバーの命を守ることに成功する。結果として、外交の専門家ローゼンよりもラーベの判断の方が正しかったことが明らかとなった。

ラーベが帰国する際、ローゼンは一言だけお礼を述べ、両者は握手をする。人道主義的な精神に基づいたラーベの機知と勇気に対して、ローゼンが率直に敬意を表している場面であると理解することができる。ローゼンは最後、お互いに好意を寄せ合っている中国人女学生のランシューとともにラーベを見送る。

### 【小考察 3】

それぞれの欧米人は、ラーベという人間存在の目撃者であり、またラーベに代わって否定的な言動を引き受ける役回りでもある。

ラーベを肯定的人物として描く上でまず障害となるのは、ラーベがナチ党员であるという事実である。この点に関して当初、辛辣な批判を浴びせていたのはウィルソンであり、ナチズムの信奉者と単なる党员とは違うという概念的区別を提供して、ラーベをナチズムとの親近性から救い出そうとしたのはデュブレであった。またローゼンとラーベの口論において、ラーベがナチス・ドイツに関してそもそも精確な知識を持ち合わせていなかったということが露呈し、ローゼンは逆説的にラーベをナチズムから引き離すことに寄与していると言える。

欧米人との交流の中で現れるラーベの人格的特性としては、次のようなものがある。日独の信義的關係を尊重する中で示される率直さや誠実さ。ドイツ本国の実情を知らず、世間の狡知に疎い、ナイーブさ。安全区の取り決めに違反して捕虜をかくまってしまったデュブレを人道主義的な立場から支え続ける度量の大きさ。生命の危険を顧みず安全区と中国民衆を守ろうとする慈愛と勇気。機知に富んだ仕方によって朝香宮中将との駆け引きに勝利する才

気煥発なさま。こうした様々なラーベの人格特性の目撃者となっているのが、他の欧米人の存在である。

同時に重要なのは、ラーベが日本人に対して決定的な憎悪や敵意を抱くことが最後までなかったという点である。日本人を敵視したり、憎悪を抱いたりする役割は他の欧米人が担っており、ラーベはそうした負の情念から解放されていると言える。

以上のように、ラーベの好感度や存在感はこうした多国間的な文脈の中で高められ、ラーベの人格的特性は普遍性を帯びた形で承認と賞賛を与えられていると言える。

#### 4. ドイツ国民としてのラーベ

ラーベのドイツ・ナショナリティは映画の中でたびたび焦点化されており、以下のように4種の傾向を指摘することができる。

##### ①ハーケン・クロイツやナチ式敬礼に示されるナチス・ドイツとしてのナショナリティ

ハーケン・クロイツやナチ式敬礼は一見ラーベをナチズムと深く関係づけるように見える。最も印象的な場面は、闇夜の中でライトに照らし出された巨大なハーケン・クロイツが、妖しくたなびきながら中国人を日本軍の爆撃から守る場面である。この機転を利かせた作戦を思いついたのはラーベであり、ラーベはその才気煥発な霊感的「閃き」によって、あたかもヒトラーの代理人であるかのような役割を担う。しかし、実際にはナチス・ヒトラーに関してラーベがほとんど知識を持ち合わせていなかったということが露呈し、結果としてラーベとナチズムを逆説的に引き離すものとして機能する。

##### ②日本の協定国ドイツとしてのナショナリティ

日本とドイツの信義的關係に期待するラーベの姿が描かれるが、これはむしろラーベ自身の誠実さを逆照射するものとして機能している。

##### ③クグロフなどのドイツ菓子において示される生活文化としてのドイツ・ナショナリティ

ラーベの帰国に伴ってジーマンスの南京支社が閉鎖されるということをフリースから知らされ、ラーベは気分が沈み込む。そうしたラーベのために、ドラは中国におけるラーベの功績を讃える意味を込めてドイツ菓子のクグロフを作る。クグロフは、さしあたってラーベたちのドイツ・ナショナリティを照射するためのキー・アイテムとして登場する。

##### ④国家社会主義者フリースとの対比において示される精神的なドイツ・ナショナリティ

日本軍によるジーマンス南京支社への爆撃があった夜の翌日、ラーベは南京支社の旧支

配人として、新支配人のフリースとこの事件の後処理を巡り、争うことになる。フリースは新しい支配人としてラーベに口出しをされたくない。フリースとしては、日本軍が襲来してきている以上、直ちに南京支社を閉めたいと考えている。会社の書類一式を断り無く持ち出そうとしたフリースに対して、ラーベが「忘れ物はないですか?」と皮肉を言うと、「ドイツ式徹底性 (Deutsche Gründlichkeit) だ」とフリースが応じる。一方、もともと南京支社を閉めることに反対であったラーベとしては、中国人従業員の生活が心配であり、人道主義的な立場からフリースの考えに反対する。ラーベは、フリースの支配人としての契約が明後日からであることを指摘し、「ドイツ式徹底性だ」とフリースと同じ言葉を使うという機知に富んだ仕方でも繰り返す。最終的に新旧支配人両者の争いは、どちらが南京支社の支配人としての権限を有しているかという点に行き着き、結局その時点では契約上どちらも正当な権限を有していないことが判明する。しかし、現時点で権限を持っているのは支配人代行の中国人、ハーンであると再びラーベは機転を利かせた形で主張し、形式上は代理人のハーンからの指示ということでフリースに南京支社内での活動を禁じる。これに対してフリースは異を唱えることができない。結果としてフリースは、自分が宿泊するはずであったゲストハウスのカギを地面に放り捨てるという無礼な態度をとることによって怒りを示し、去っていく。

#### 【小考察 4】

一般に越境的な物語設定は、登場人物のナショナリティを焦点化する働きを持つ。ところが、長年故郷ドイツを離れて中国で暮らし、しかも帰国を間近に控えたラーベであるが、ラーベはあまり祖国ドイツへのノスタルジックな関心を示さない。むしろラーベの関心はこれまで自分が中国において築き上げたものにある。ドイツ菓子のクグロフがさしあたってはドイツ・ナショナリティを照射するためのキー・アイテムとして登場するが、これも最終的にはあまりノスタルジーとは関係づけられず、妻ドラとの結びつきを示す意味合いの方が強い。

とはいえラーベがナショナリティを欠いた無国籍的な人物として描かれているわけではない。象徴的な場面は、熱狂的な国家社会主義者フリースとの「ドイツ式徹底性」を巡る機転の勝負において、ラーベが勝利する箇所である。これはドイツ・ナショナリティの正統性を巡る争いである。ラーベの勝利は、中国民衆のことを心配するラーベ的な人道主義こそが正統なドイツ・ナショナリティであることを意味し、ヒトラー率いるナチス・ドイツは、本来のドイツ・ナショナリティとは無関係であることが示される。そして、一種の霊感的とも言える「閃き」の能力もヒトラーの占有から解放され、才気煥発な人道主義者ラーベはまさにドイツ精神を体現した人物として位置づけられる。



## 結 論

ラーベはドイツ・ナショナリティを象徴的に体現する存在であり、そして彼のドイツ・ナショナリティは他の登場人物との多国間的な関係性や越境的物語設定の中で様々に意義づけられる。

第一に、ラーベと日本人、ラーベと中国人という三者関係は、物語が展開していく上での大きな枠組みを作り出していると言える。最初ラーベはドイツの協定国である日本に対して少なからぬ信頼を寄せていたが、物語が進展する中で欺瞞に満ちた日本人の姿が明らかになる。一方、逆にラーベは初め中国人をあまり信用せず、そして格下の存在として扱い、中国人に対してはドイツ的教養を教条主義的に叩き込む対象として父権主義的な態度をとっていた。ところが、やがて中国人に対して持っていたラーベの人道主義的な愛情や慈しみの感情が前面に現れ出るようになる。そして、最終的にラーベの指導が実を結び、啓蒙された中国人は安全区を守ろうとして日本軍の前に立ちふさがり、市民的勇気としてのドイツ精神を引き継いだ存在へと成長する。ラーベに対する日本人と中国人の位置づけは、物語展開の中で交差し、そして大きく逆転していく。

こうした日本人像の変転は、最終的には日本とナチス・ドイツとの親近性を示すことへと行き着く。このことは、ラーベをナチズムから切り離していく物語展開を後押しするもう一つの物語構造として大きな役割を果たすところとなる。この点に関して重要なのは、物語の終局において、安全区を作ったのは日本軍であると嘘の発表をする朝香宮中将と、その安全区の管理を任されるフリースとが握手をする場面である。この場面において明確に語られているのは、ナチス・ドイツとラーベに代表されるドイツ国民一般（単なる党員も含む）とは無関係であり、むしろナチスと親近性があるのは日本だという点である。朝香宮中将とフリースの握手は欺瞞的なものの象徴として機能していると言える。しかもここで前面に登場してきているのが、日本軍の本来の責任者であるはずの松井大将ではないということにも注意が必要である。というのも天皇陛下の親族であることを権威付けに利用する朝香宮中将とヒトラーの追随者フリースとの併置は、当然のことながら、昭和天皇とヒトラーの併置を示唆することにもつながるからである。ただし、両者が物語の中に直接登場することはないゆえに、この場面の大部分の意図は最終的にヒトラーの熱狂的な追随者とドイツ国民一般（単なる党員を含む）との切り離しに収斂していくと考えられる。

第二に、ラーベと他の欧米人との関係では、ラーベの人格的特性を承認し、賞賛を与える役割を他の欧米人が担っていると言える。まず欧米人との交流の中で表れるラーベの人格的特性としては、率直さや誠実さ、世間の狡知に疎いナイーブさ、度量の大きさ、慈愛と勇気、才気煥発なさま、などが挙げられる。こうした様々なラーベの人格的特性が、人道主義

的な言動の中で表れる様を欧米人は目撃し、そしてナチ党员であったラーベは徐々に信頼を勝ち取っていく。また同時に他の欧米人たちは、否定的な言動をラーベに代わって引き受ける役回りでもある。物語が展開する中で、日本人が否定的に描かれていくとはいえ、最後までラーベ自身が日本人に対して決定的な憎悪と敵意を抱くことはない。日本人を敵視したり、憎悪を抱いたりする役回りは他の欧米人たちが担っており、ラーベはこうした負の情念からは解放されている。結果として、ラーベは他の欧米人たちと深い絆で結ばれた信頼関係を築くことに成功し、最終的にはこれに中国の民衆も加わることで、日本人と敵対する形で著しい多国間関係が形成される。ラーベの好感度や存在感はこうした多国間的な文脈の中で高められ、ラーベの人格的特性は人道主義に基づいた普遍性を帯びた形で承認と賞賛を与えられたことになる。

第三に、こうした普遍的価値を持ったラーベの人格的特性は、ドイツ・ナショナリティと結びつけられることにもなる。この点においてまずもって大きな役割を果たすのは、故郷ドイツを離れて暮らすという越境的な設定である。この物語設定によってラーベはナチス・ヒトラーという特殊ドイツ的な事情から切り離される。またラーベは、自身が中国において成し遂げた種々の業績に大変な愛着を感じており、この点においてラーベは特殊な祖国愛からも切り離される。とはいえラーベがナショナリティを欠いた無国籍的な人物として描かれているわけではない。熱狂的な国家社会主義者フリースとの「ドイツ式徹底性」を巡る機転の勝負において象徴的に表れているように、ラーベはナチス・ドイツを代表するフリースとドイツ・ナショナリティの正統性をかけて争うことになる。そして、この対決にラーベが勝利することによって、才気煥発、慈愛、勇気等々を伴って出現する、普遍的価値を有したラーベ流の人道主義こそがドイツ精神の本質である、という解釈を観者に促すこととなる。また物語のクライマックスでは、ラーベが再び「ドイツ式徹底性」を思い起こさせる機転を利かせた作戦によって朝香宮中将との対決に勝利する。この朝香宮中将との対決は、物語のエンディングで朝香宮中将とフリースが握手をすることから、実はこの対決もドイツ・ナショナリティの正統性をかけた勝負であったことが判明する。こうしてヒトラー率いるナチス・ドイツは、本来のドイツ・ナショナリティとは無関係であることが示され、一方、勇気と慈愛と才気に富んだラーベは、普遍的価値を有した人道主義に基づく正統なドイツ・ナショナル・アイデンティティを体現したまっぴき英雄として描かれることとなった。

以上のように国民映画としての《John Rabe》は、ナショナル・アイデンティティの範例的なあり方を、ポスト・ナショナルな時代に適切に沿うような形で提示しようと試みた作品であったと言える。

本稿は公益財団法人大川情報通信基金の助成（2011）を受けて行った研究成果の一部である。

Abstract

An Analysis of the Transnational or International Story Structure  
of the National Cinema “*John Rabe*”:  
A German National Identity in Postnational Times

Hiroaki FURUKAWA

It could be said that the German film “*John Rabe*” is a national cinema because it describes a good German national who helped many human lives and reminds German nationals of the nation’s conscience. When the film “*John Rabe*” presents John Rabe, who is the heroic protagonist of the film, as a good German national, the film uses transnational or international relations like other German films produced since 2000 do. In postnational times when people praise something transnational or something international, it has been hard for the national identity to be brought out noticeably in Germany especially because of the trauma of the Nazis. The reason many German films used transnational or international settings is that it was easier for audiences to accept the depiction of a good German national when it was shown in relation to other nationalities. This paper seeks to analyze the transnational or international story structure in “*John Rabe*” and to show clearly how this film tries to present a German national identity.

Firstly, the relations of Rabe and the Japanese and Chinese make the main story structure of “*John Rabe*.” At the beginning, Rabe trusted the Japanese because Japan made an agreement with Germany. When he sees them do a barbarous act, however, he gradually gets disappointed with the Japanese. On the contrary, Rabe did not trust the Chinese very much and educated them with a dogmatic and paternalistic attitude at first. However, his humanitarian affection toward them gradually appears in the film. As a result, the Chinese become courageous people who carry on the German spirit, and Rabe, as a member of the Nazi Party, stood apart from Nazism while the Japanese came closer to the Nazis.

Secondly, the Europeans and Americans other than Rabe play the part in the film of recognizing and admiring Rabe’s personality. Rabe is a member of the Nazi Party. As the Europeans and Americans other than Rabe see his personality appear in his humanitarian words and actions, he gains their confidence and praise. They also play the part of saying

bad things about the Japanese on Rabe's behalf. Therefore, his personality can evade this negative emotion. As a result, his personality succeeds in having universality in international relations.

Finally, Rabe's personality, which has the universal worth, is tied to German nationality. In a transnational setting, the protagonist Rabe stands apart from the peculiar situation of nostalgia for his home district Germany, namely Nazi Germany. He lived in China for a long time, and since he had accomplished a great deal there he felt more attached to China than his homeland Germany. However, "*John Rabe*" does not present Rabe as a person who has no national identity. He contends with Fliess, who trusts in Nazism, for a victory in "Deutsche Gründlichkeit," that is to say "German thoroughness," and wins the legitimacy of German nationality. "*John Rabe*" insists to the audience that Rabe's humanism is the exact essence of the German spirit. "*John Rabe*" seeks to present Rabe as the heroic person who embodied the legitimate German national identity based on the humanism which has a universal worth.

This work was supported by The Okawa Foundation for Information and Telecommunications (2011).